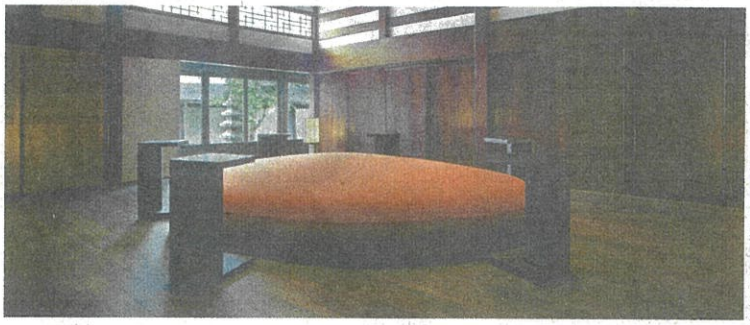
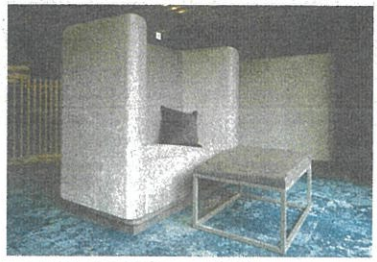
2020.2.26 日経MJ

例年3㍍を超す雪が降り積もる新潟県南魚沼市。生活には厄介な雪を観光資産に仕立てる取り組みが、創業50年の老舗旅館で進んでいる。新しい経営陣は「引き算の視点」で無駄な装飾を省き、スキーに頼るのではなく、雪そのものを魅力に変える「雪国のデザイン」を進めている。

雪国の厄介者 魅力に昇華

老舗旅館「引き算の視点」で再生





暖冬のなか、2月に入ってようやくまとまった雪が降り積もった南魚沼市で昨年10月に開業した温泉旅館「ｒｙｕｇｏｎ（リュウゴン）」。雪景色をまとい、静寂の中に重厚な姿を見せている。

もともとは1969年に創業した温泉宿「龍言」。約3万平方㍍の敷地内に、約270年前建てられた豪農の館や武家屋敷を移築。新潟を代表する旅館だった。ただ、経営に行き詰まり、2年前にオーナーが変わっている。

過多な装飾省き 伝統建築前面に

新しい経営者が改修で取り入れたのが「引き算の視点」だ。以前、ロビーには畳の上にじゅうたんが引かれ、家具に高価な書や置物が所狭しと並べられていた。これを全て取り除き、赤いソファを置いた。宿泊客はシンプルな空間で、国の登録有形文化財にもなっている伝統建築を眺めることに集中できる。

和室21室、ヴィラ8室の構成で、離れに位置するヴィラからは庭園を望める。散策できた庭園を人が入れないようにし、部屋から他人の目を気にせずに眺められるぜいたくな風景に仕立てた。

引き算の視点はその離れに通ずる廊下にも見られる。内廊下の外壁をすべて撤去し、外廊下にしてしまったのだ。雪が降れば、雪回廊に早変わり。「都会人にとって雪の上を歩けるのはエンターテインメント」と改修を手掛けた建築家の蘆田暢人さんは話す。

蘆田さんは、雪国の建築は雪に対峙するために閉鎖的な空間になりがちで「周囲の自然との関係を切断してきた」と指摘する。そこで暗く閉ざされた廊下を外とつながれる空間に変えた。冬は雪を間近で体感できるし、夏は吹き抜ける風とともに虫や鳥の鳴き声、木々の香りを感じることができる。

当初、雪国で育ってきたスタッフは「ありえない」と猛反対した。唯一賛同したのが、オーナーの井口智裕さん。内廊下の時にはストーブなどで寒さ対策をしていたものの、日本家屋だけに隙間風が入り寒い。夏は夏で中途半端に暑かったという。外廊下にすることでそうした不満要素は解消でき、灯油代も大幅にカットできた。

今回の改修では、断熱材を補強して建物全体の断熱性を上げるとともに、井戸水を循環させた冷暖房システムを導入した。サステナブルな建築も重視した。

雪降れば雪回廊 エンタメ性発信

オーナーの井口さんはＪＲ越後湯沢駅前で温泉旅館「越後湯沢ＨＡＴＡＧＯ井仙」を経営する。4代目の社長として引く継いだ2005年、ビジネスホテルのようだった施設を、ホテルの使い勝手を残しつつ、旅館的な情緒を残す温泉旅館に改めた。年間の部屋の稼働率は78%と、旅館平均が4割とされている中で高い人気を維持している。

ｒｙｕｇｏｎの経営に乗り出したのは、こうした成功体験が生かせると確信したから。外部の資本が入る前に「地元の手で地域のシンボルを再建させる必要がある」とも感じた。部屋で個別に過ごすことが多い旅館に、囲炉裏やバーといった共用スペースを設け、宿泊客同士の交流の場を作るなど、今回も「ホテルと旅館のいいとこどり」を試みる。

一方で、自身が代表理事を務め3県7市町村にまたがる雪国観光圏のフラッグシップとなる拠点をかねて求めていた。雪はとかく厄介者とされてきたが「それはクルマ社会での話で、我々の先祖は縄文の頃から雪と共生してきた」。雪を地域の魅力に転換する「雪国のデザイン」を進めている。

ｒｙｕｇｏｎはまさに、その「ワンストップ窓口」と位置づける。建物や環境だけでなく、雪国で育まれた食文化などを年間通して紹介していく。館内や部屋には雪が積もった形をイメージした家具を配置し、テーブルには雪が溶け落ちた様をかたどった。雪が降らない時期でも雪の気配を感じられる仕掛けを施す。敷地内にはまだ手を付けていない建物などが残っており、「雪国のデザイン」の余白は大きい。

（ライター　佐藤俊郎）